

1人当たりのGDPは、マレーシアが東南アジアナンバーワン

ジェトロのデータによると、アジアへの小売企業の参入が相次ぐ背景には、アジア諸国の所得水準の向上がある。アジア各国の1人当たりGDPは、2000年代に各国とも年平均10~20%程度の伸びで上昇してきた。マレーシア(11年予測値8,617ドル)、タイ(同5,281ドル)、中国(同5,184ドル)は既に5,000ドルを超え、14年には、マレーシアは先進国水準とされる1万ドルに到達する見込みだ。また、2億5,000万人の人口を抱えるインドネシアも3,469ドルと、消費が活性化するとされる3,000ドルを超える水準に達した。インド(同1,527ドル)、ベトナム(同1,362ドル)などはまだ1,000ドル台だが、都市部では富裕層が生まれている。

食品雑貨系の店舗別の売り上げに占める近代的店舗(ハイパー、スーパーマーケット、ディスカウントストア)の割合は、中国が58.3%、マレーシア44.3%と既に近代的店舗が一般化しており、タイ(同19.8%)やフィリピン(同18.4%)も2割近くまで上昇している。

<百貨店、ハイパーマーケット部門が伸び率1位>

10年の小売業の売上高は1,346億5,500万リング。増加率で見ると、百貨店、ハイパーマーケット部門が前年比21%増の361億1,600万リングと、最も伸びた。市場占有率で見ると、専門店が最も多く、全体の約5割を占めている。マレーシアでは、フランチャイズは事業拡大に安全で適した業態として人気が高い。専門店の多くは開発が相次いでいる大型ショッピングセンター内のテナントとして、フランチャイズの業態で展開し、多店舗化を進めている。

存在感増す複合型ショッピングセンター

クアラルンプール市内には66カ所のショッピングセンターがあり、代表的なものとして、「スリアKLCC、パビリオン、ガーデンズ」が挙げられる。

ショッピングセンターには、映画館などの娯楽施設が併設され、高級コンドミニアムが隣接する複合型商業施設になっている例もある。スリアKLCCには伊勢丹、コールドストリッジ、パビリオンにはパークソン、タンクス、ガーデンズにはジャスコ、伊勢丹、カルフルなど集客力が高い大型アンカーテナントが出店している。営業時間は、月曜日から木曜日と日曜日は10時から22時まで、金・土曜日は10時から24時まで営業が許可され、

平日、週末を問わず夜遅くまで買い物客でにぎわっている。

複合型ショッピングセンターが存在感を増す一方で、小売業の1割を占める、いわゆるパ
パマストアといわれる食料雑貨店は、商品の品ぞろえが豊富で便利な百貨店や、価格が
魅力的なハイパーマーケットの登場により伸び悩んでおり、年々シェアを落としている。
主要小売業を売上高でみると、国内最大手は年間売上高47億2,900万リンギのGCHリテ
ール（香港デリーファーム）。同社の強みは、中間層から高所得者をターゲットとしたス
ーパーマーケットの「コールドストレージ」、価格が割安なプライベートブランドを提供す
る低所得者層向けのハイパーマーケットの「ジャイアント」、薬品や生活用品を取り扱う「ガ
ーディアン」の複数ブランドを展開することで、幅広い消費者を獲得している点だ。

表2 マレーシアの主要小売企業 (単位:100万リンギ)

| 企業名 | 09/10 年度 売上高 | 資本金 | 設立年 | 従業員数 | 業態 |
|----------------------------|--------------------|-------|------|--------|----------------------------------|
| GCHリテール | 4,729 | 1,500 | 2004 | 13,000 | スーパーマーケット・ハイパー マーケット |
| イオン | 3,736 | 500 | 1984 | 10,600 | ジャスコ、ショッピングセン ター、クレジットカードサービス |
| テスコ | 3,530 | 56 | 2000 | 8,150 | ハイパーマーケット |
| MYDIN MOHAMEDE Holdings | 1,435 | 100 | 1991 | 7,000 | スーパーマーケット、フラン チャイズ、卸売り |
| セブン-イレブン | 1,186 | 50 | 1984 | 926 | コンビニ |
| THE STORE | 1,183 | 50 | 1968 | 10,000 | スーパーマーケット・百貨店 |
| コズウェー | 774 | 500 | 1979 | 719 | 日用品、パーソナルケア、ヘル ルスケアなどの直接販売 |
| パークソン | 625 | 100 | 1986 | 3,500 | 百貨店 |
| 伊勢丹 | 500 | 25 | 1981 | 850 | 百貨店 |
| そごう | 192 | 50 | 1990 | 500 | 百貨店 |
| METRO JAYA | 141 | 300 | 1974 | 1,500 | 百貨店 |

(出所) 国営ベルナマ通信・マレーシア貿易振興会・ベイシス共著「マレーシア1000
(2010/2011版)」(マレーシアの売上高上位1000企業のランキングを掲載)

日系企業では、「伊勢丹」(1981年設立)と、「ジャスコ」を展開するイオン(84年設立)
の2社が中・高所得層を対象に展開している「そごう」は、1997年に現地資本に売却され、
日本資本は入っていない。

このほかに、専門小売店として、「ユニクロ」が2010年に進出、11年7月には日本の商品
や食品を取り扱う32のテナントが集合した「トウキョウストリート」が「パビリオン内」
にオープンし、100円ショップの「ダイソー」が入居している。

マレーシアには、店舗を持たない直接販売の業態も小規模ながら多数ある。代表的な企業
としては、地元有力資本ベルジャヤグループ傘下のコズウェーがあり、健康食品などのヘル
ルスケア商品、日用品などの商品を扱っている。直接販売形態では最大手だ。

マレーシアのイオン

REUTERS より

仏小売り大手カルフルは、マレーシア事業をイオンに売却したことを明らかにした。イオンは1億4700万ユーロで全株式を取得する。カルフルのマレーシア法人の価値は、債務も含めて2億5000万ユーロ相当。債務も含めて、イオンが引き受ける。

カルフルマレーシアは都市部を中心に**ハイパーマーケット26店舗**を展開する同国4位の存在。2012年6月期の売上高は4億ユーロ。

一方、イオンは、総合スーパー（GMS）**25店舗**、スーパーマーケットを**4店舗の計29店舗**を展開しており、同国3位。両社計で売上規模は約**1220億円**となり、同国ではGCHリテール（香港デイリーファーム）に次ぐ第2位のポジションとなる。

イオンは「出店スピードを加速させ、2020年までに100店舗体制を構築する」としている。

カルフルのプラサ最高経営責任者（CEO）は、業績低迷を受け、これまでの事業戦略を見直し、主要市場に経営資源を集中し、債務削減を進めている。マレーシア事業の売却もその一環。

一方、イオンは、2013年までの中期経営計画で、アジアシフト、都市シフト、シニアシフト、デジタルシフトを柱として打ち出している。アジア市場については、モータリゼーションの進展に伴いニーズが高まるショッピングセンター（SC）をはじめとして、GMS、スーパーマーケット、金融など、グループ一体となって事業を進めている。

アジアでの展開を強化するため、11月1日にはASEAN（東南アジア諸国連合）地域のグループ事業を統括する「アセアン本社」をマレーシア・クアラルンプールでスタートさせた。すでに、今年3月から北京で中国本社が活動を始めており、日本・ASEAN・中国の3本社体制を確立させた。

<http://jp.reuters.com/article/topNews/idJPTYE89U07N20121101>

カルフルの店舗跡のイオン新ブランドは、「BIG」

カルフルのハイパーマーケットをどう運営するのか興味がありマレーシア訪問した。

偶然、「ミッド・バレー・メガモール」の中には、前からイオンとカルフルが同居していた。それがどう変わったか。

マレーシアイオンのハイパーマーケットの新ブランドはイオン「BIG」



4月に元カルフルの店をリニューアルしたばかりの店を偶然見ることができた。

すぐ近くのイオンとの競争を避け、家電や雑貨、衣料、家具、食品、菓子を強化した「ドライ型の店舗」である。それにしても、かなりの大型店である。

28ページのオープンチラシの内、生鮮食品のページはたったの3ページだけであった。



店内は、天井など黒をベースにし高級感が溢れている。

しかし、マレーシア人にとってはまったく新しい店でもある。



ドライ食品売場は、カルフルのイメージも少し残している。



生鮮の陳列ケースも黒、POP も黒を基調にしている。

しかし、まだなじみがないせいか、客数は少ない。

レジ係に、「いつこの店はオープンしたのか？」と聞けば、「10日位前」と答える。

「あなたはカルフルの従業員だったの？」の答えは「イエス！」

「店長は？」、「もとカルフルの店長！」「イオンの幹部はいるが、殆どが元カルフルの従業員！」であると緊張した様子で答えてくれた。

従業員には緊張感がり、モチベーションの面では問題がなさそうである。

まるで、ここは「イオン・タウンだ」

同じフロアにある既存店イオン 客はよく入っている





「BIG」とは違い生鮮強化型の店舗

日本からの輸入品やイオンのPB商品（トップバリュー）を多く扱い、「ウェット型店舗」として「BIG」との差別化を図っている。



日本産のりんごや、ホクトの「きのこセット」など日本色の強い店である。



鮮魚の対面販売



平ケースに氷を張りバラ販売



デリカ売場では、日本の弁当、丼、寿司を強化している。



商品づくりのレベルは高い。品揃えは日本並み、いや日本以上かも知れない。



さらに、近くにはイオンのドラッグストアの「イオン ウェルネス」もある。

まるで、マレーシアの「イオンタウン」である。若い女性のガイド曰く、「やっぱりイオンだわ！」

「私は日本が大好きで、イオンでしか買物をしない」とまで言う。確かに現地では、イオンの信頼度は高い。

業態が違えば、共存できる。

シンガポールの「VIVO モール」と全く同じスタイルである。

シンガポールのセントーサ島に渡るロープウェイの近くに「VIVO」というショッピングモールがある。その中には、GHC リテール（デリーファーム）が経営するスーパーマーケット「コールド・ストレージ」、ハイパーマーケットの「ジャイアント」、ドラッグストアの「ガーディアン」の3業態が同居してよく客が入っている。

このモールもまったく同じスタイルである。

「BIG」は、「テスコ・エクストラ」、「ジャイアント」と互角に戦えるか？

イオンの課題は、GMS や大型食品スーパーマーケットはマレーシアでは強いが、ハイパーマーケット「ジャイアント」、ドラッグストア「ガーディアン」といかに戦えるかである。

テスコ、GHC リテールは、ハイパーマーケットを得意とする企業で実績もある。GHC はドラッグストアも数多く展開している。

カルフルスタイルのハイパーマーケットでは、中間層が増加しているマレーシアで通用しないことが証明された。

イオンの新業態「BIG」に期待したい。

クアラルンプール AMPANG の「テスコ・エクストラ」

この店は、2010年に一度見ています。

詳しくは、<http://www.shirotori-f.com/sp/data/09malaysia.pdf>

を参考にして下さい。



テスコ 「フレッシュ&イージー」 アメリカ正式撤退

2013年、4月17日にテスコは正式にアメリカから撤退することを表明した。

売り先はまだ決まっていない。私が見た、トーランスの「フレッシュ&イージー」の新店は「まぼろしの店」となってしまった。しかし、2年弱で「コモディティ型の店舗」から「ミール・ソリューション型の店舗」に転換した、トップの勇気とスタッフの商品開発のスピードに拍手を送りたい。

テスコは、日本、アメリカと先進国から撤退したことになる。

その原因は、私は「現地化の失敗」であると考える。

日本では、100坪前後の「つかめ」を買収して、「テスコ・エクスプレス」の小型店に挑戦したが、日本のSMのスタイルをそのままマネて失敗。

アメリカでは、300坪スタイルの「テスコ・ネバーフットマーケット」で、アメリカ進出当時は、PB商品を中心にした「コモディティ型」であったが、ここ2年は「テスコ・エクスプレス」などのコンビニに近い「ミール・ソリューション型」に変更したが、「時すでに遅し」であった。

皮肉にも、イギリス本国では「ミール・ソリューション型」の店が主流となる。

テスコだけでなく、アズダ、セインズベリー、モリソンズ、マークス&スペンサー、ウェイトローズ、アルディ、アイスランドまでがこぞって「レディ・ミール商品」を開発し、世界で最先端の「レディ・ミール先進国」となった。

「時代のいたずら」としか考えられない。

もし、「つるかめ」の100坪が、今のイギリスの「テスコ・エクスプレス」であったら、アメリカの「フレッシュ&イージー」が最初から、「テスコ・メトロ」で出店していたらどうなっていたらだろうか。

詳しくは、「ロンドンのスーパーマーケット見聞録」を参照してください。

<http://www.shirotori-f.com/sp/data/36London.pdf>

「独自化」を行った、アジア事業（タイ、マレーシア、中国、韓国）は成功している。

テスコは、マレーシアに2002年に参入し、現在テスコ・エクストラとテスコ・スーパーストアを35店舗展開している。

売場面積は、マレーシア(平均7,446㎡)と中国(7,470㎡)だけが7,000㎡を超える平均売場面積を有している。マレーシアでは郊外の出店が主で、得意とする大型ハイパーマーケットに絞り出店しているということである。



テスコの青果売場は、木製の平台を使うのが特徴
ヤングコーンのむき方がおもしろい。



入口付近にはドライ食品のバンドル販売

青果売場は「グリーン」、鮮魚売場は「ブルー」、精肉売場は「レッド」と色分けしている。



丸物魚の陳列は、尻尾部分を氷に付き刺し、頭が上に出ているユニークな陳列方法



マレーシアでも寿司はすっかり市民権を得ている



イスラム系の方は、豚肉は食べない。インド人は牛肉を食べない。牛肉の色はどの店を見てもよくない。どちらの民族も鶏肉が中心



商品のイノベーション プラカップの中に白いソフトボールのような物が入っている。ヤシの実の外の部分をキレイに取り除いたもの。フタを取りストローを突き刺して中のココナッツジュースを飲む、白い外皮もそのまま食べられる。ガイドも「初めて見た」という商品。



冷凍食品の「ラザニア」「シーフードスープ」「ココナッツジュース」「ミートパイ」「イチジクのジャム」を購入。「ラザニア」は、TescoのPB商品の印象としては、3年前とあまり変わっていないが、客はよく入っている。

マレーシア GCH リテール

アジアに 4000 店以上を展開する香港資本の小売業

GCH リテール「Dairy Farm」は、1886 年に香港で創立された、Jardine Matheson Groupの傘下の小売部門。

D. F. は、中国、台湾、香港、マカオ、ベトナム、シンガポール、マレーシア、インドネシア、ブルネイ、インドにおいて総合スーパー、食品スーパー、コンビニ、ドラッグストア、ホームセンター、飲食業を展開する企業。

2008 年の調査では、売上高約 7,700 億円 営業利益 6% 店舗数約 4,400 店 従業員数約 73,000 人とアジアを代表する大企業である。

アジア各国では、「ウエルカム」の名前で小型店舗を展開しているが、マレーシアでは、「コールドストレージ」(SM)、「ジャイアント」(ハイパーマーケット)、「ガーディアンズ」(ドラッグストア)の名前で店舗展開を行っている。

マレーシア GCH リテールは、マレーシアでナンバーワンの小売業。

日本のイオンは、この英系 GCH リテールとTescoと戦うことになる。



最近オープンした郊外のジャイアントを視察。平日であるため客数は少ない。



生鮮食品は、店舗中央部分に縦型にレイアウト。
ブルーの看板が「鮮魚」、赤の看板が「精肉」と分かりやすい。
付き当りが鮮魚売場。「コの字型」に売場を取り、中央に平ケースを設置。
バックヤードが見えないため、清潔感がある。



鮮魚売場の隣は、精肉売場の対面。ここも、臭いがなく衛生的であった。



冷凍食品売場の「ベジタリアンのためのレディ・ミール」
インド、イスラム系の人の中には「ベジタリアン」が多い。
肉も魚も使用せず、植物性タンパクを肉や魚の代わりに使っている。

「コールド・ストレージ」

コールド・ストレージは都市型小型 SM

ミッド・バレー・メガモールの隣の「ザ・ガーデン」の店と、ツインタワーの地下の2店舗を視察。



どちらのレイアウトもほぼ同じである。ツインタワーの店は、以前に比べて客数が増えている。商品の陳列量も前に比べて増している。



高級感を醸し出す店内



ワインとつまみの展開もできている



デリカも充実している。キュウリとトマトでカラーコントロール
ツインタワー内のコールド・ストレージ



客は以前に比べて良く入っている。



入口のデリカコーナーには、日本の「弁当」スタイルの商品が並べられている。
今、世界で話題になっているのが、「日本の弁当」外食でも、弁当を出す店が増えてきている。



精肉、鮮魚は最低限の品揃え



イギリス「ウェイトローズ」の冷凍 PB 商品を扱っている。



冷凍食品売場のレディ・ミール

冷凍食品売場には「フィッシュ&チップス」などの揚物を主体としたレディ・ミールが並ぶ。当然、ピザやパスタなどの商品も定番になっている。

イギリスのスーパーマーケット「ウェイトロウズ」のPB 冷凍レディ・ミール

韓国のSSGにも品揃えされている商品

ウェイトロウズはPB商品を海外に輸出しているが、価格は少し高め。



「フィッシュ・コロッケ」を購入

すでに焼いたパン粉が外に付いているが、中は生のままである。

オーブン200℃で30分の加熱と書いてあるが、電子レンジで試してみたが、電子レンジではうまくできなかった。



カットフルーツとキュウリにきな粉と甘味噌のタレを絡めて食べるもの。何とも奇妙な味である。野菜サラダは、クルトン、ドレッシング、フォークがセットされている。アジアで食事をしたり、食品を買って食べると、「歯がガタガタ」になる。それだけ、野菜も果物も日本の物に比べて硬いのだ。

マレーシアは天然資源豊富な国

マレーシアの特産品は、石油と天然ガス、スズなどの天然資源のほかに、ゴムや油ヤシなどの産地である。ちなみに、ガソリン1ℓの値段は日本円で約70円、エコノミーカーを購入する意味がない。市内を走っている車は大型車ばかりだ。

旧日本軍は豊富な資源を求めて「南下作戦」を行った理由がよく分かる。

さらに、労働資源も豊富である。

ゴムの採取や油ヤシの採取は、マレー人が行っている訳ではない。インドネシア、バングラディシュ、ネパール、インド、イランなどからの安い出稼ぎ労働力が豊富である。1日何百円で働いている外国人出稼ぎ労働者。かつて、イギリス人は、インドから連れてきたインド人やマレー人を使い、ゴムやスズ、胡椒などを、西インド会社を通じて本国に送っていた。今は、マレー人が同じことをしているのだ。このことから、1人当たりのGDPが高い理由が分かる。シンガポールは先進国ではあるが、国の大きさから資源に乏しい。水もマレーシアからパイプラインで運んで買っている状態だ。

天候にも恵まれた国

ゴムの木や油ヤシの木は、一度植えてしまうと後はあまり手を加える必要はない。適度なスコールもあるので、水をやる心配もない。最近では、油やしから車の燃料の研究をしているらしい。ガイド曰く、「将来はシンガポールを上回る」とまで豪語する。確かに、それだけのポテンシャルは持っているようだ。

クアラルンプール最大の生鮮市場「チャウ・キット・マーケット」

どこの国を訪れても、地元の生鮮市場を見るようにしている。「スーパーマーケットでは買物ができない層」が集まるウエットマーケット。ウエットマーケットというより、「水たまりマーケットだ」



この市場は、主にインドネシア人が多く利用しているとのこと。

マレー人は、所得が上がりスーパーマーケットやデパートで買い物をするようになったが、外国からの出稼ぎ労働者は、こうした市場で買い物をする。



カレー粉やウコンを塗った鶏肉。豚肉や牛肉はあまり売られていない。
どこの市場にもある動物の頭の展示品
客寄せのために展示してあるが、あまり趣味はよくない。
その隣で、牛の足や内臓を水で洗っている。



下水道完備ではないため、水は垂れ流し。それが、水たまりをつくる。



袋に入ったジュースやロンガン水（ラカンカ）やゼリーも売られている。



市場の中の惣菜屋。魚を揚げたものや干物を売っている。

インドネシア人の好きな「テンペ」

手作り品であるため、本場の味を買って確かめるべきであったと反省



中国や台湾のように、生きた鶏や鳩、カエルは売られていない。

アジアでは、スーパーマーケットやデパートで買物ができるのは、中間層以上。

それができない低所得者は、こうした街の生鮮市場で買物をする。

最近は観光客もあまり訪れないようである。

オールドチャイナカフェ



マレーシア中華街にある「オールドチャイナカフェ」



ガイドと二人で、「ナシ・レマツ」「パイ・ティー」「ニョニヤ・ラクサ」を注文



「パイ・ティー」揚げた小麦粉のカップの中に色々な具材を詰めて食べるもの。
アメリカのフレッシュ&イージーでもカップが売られていた。オードブルに使える最高。



「ナシ・マレツ」ココナッツミルクと青い天然色素でご飯を炊いたもの。鶏肉の煮物、小魚、揚げピーナツ、揚げ湯葉などが付いている。マレーシアでは最もポピュラーな料理
「ニョニヤ・ラクサ」ココナッツの辛口スープに麺が入っている。トッピングにはエビや野菜、揚げパンなどがある。

蟹の島 クタム島へ往復6時間かけてカニを食べに行く

KLAGとはカニの意味で、島にはカニのほかに、エビやシャコなどが養殖されてるらしい。地下鉄の「AMPANG PARK」から、「KL SENTRAL」へ行き、さらに、1時間かけて KTM で終点の「PELABUHAN KLAG」へと向かう。



電車を降りれば目の前が船着き場

終点の「PELABUHAN KLAG」から高速ボートで、約40分でクラム島に到着。

所要時間は、アパートメント出てもう約3時間も経っている。



高速ボートはかなり古いが揺れは少ない。船はマラッカ海峡を進む、対岸はインドネシア。中は狭く、観光船とは程遠い船。



クタム島は、マングローブの島で、住居は橋桁の上に建っている。カニは確かにいる。



船を降りて棧橋を歩けば、島の商店街。食堂とみやげ物屋が立ち並ぶ。



島には車がなく、走っているのは自転車とバイクだけ。
島の住人の90%は、福建省出身の中国人。何か中国の魚村に迷い込んだようである。



適当な食堂を物色する。

平日であるため観光客は少ない。奥の方で家族が昼食をとっている。

店を選ぶ場合は、店の雰囲気と従業員の人柄。ちゃんとした料理を出しそうであったので、この店を選ぶ。店の前には、生きたカニが入ったバケツが置かれている。



メニューは写真付きであるが、価格は「時価」と書いてある。

マングローブに住む、どろカニを食べたかったが、ワタリガニに近いカニしかないため、焼きビーフンの上に蒸しカニがのった物と、野菜炒めとビールを注文



一応、一人前でいくらになるか聞いてみる。

カニが、R40（約1400円）、野菜炒めがR25（900円）ビールを含めて、約R70（2500円弱）観光地価格であるのこれくらいすると覚悟していた。

カニの熱加減が絶妙

このタイプのカニは何度も食べたことがあるが、カニを蒸して中国醤油でサッと炒めてありおいしい。蒸し加減もちょうどいい。

新鮮なカニを使っているため、カニ肉は柔らかくモチモチとした食感。冷凍したカニではないため、パサついていないし、味も濃い。

下の焼きビーフンと野菜炒めは薄味で食べやすい。十分、満足した。



島内はとにかく蒸し暑い。エアコンの効いたカフェなどは存在しない。
カニで十分満足したので、観光もそこそこに1時間程で島を離れることにした。



おいしいカニを食べた後、見てはいけないものを見てしまった。

最後にトイレに入って、ハッと気付く

島の生活は昔のままで、棧橋の上に住居が建っているため、「糞尿」は海に垂れ流しである。
浄化施設がないため、島の住人にとっては、これは当たり前のことである。たぶん、水も
雨水ではないかと思う。

住民だけだと全然問題ないが、外部からの人が増えると今後問題が増える。

週末には多くの観光客が島を訪れるらしい。

「それも？」と思うと、「さっき食べたあのカニは大丈夫？」かと心配になる。

「あのカニの調理温度は、大腸菌（0157）が死滅する、中心温度75℃1分以上加熱されて
いただろうか」と心配になる。

結果としては何も問題はなかった。

島ではカットフルーツなども売られているが、その点の衛生管理が心配。

アジアの旅は、こうしたリスクが付きまとうことを十分注意しなくてはならない。

「観光客は、自分の糞尿は袋に入れて持ち帰れ！」と提案したい。

マラッカ

大航海時代の波に翻弄された都市

ツアーに申し込み「マラッカ」を訪れる。KL から車で2時間の距離。マラッカは、「マラッカ海峡」で有名だが、その地理的特徴のため、複雑な歴史を持っている。14世紀には「マジャパヒト王朝」が栄え、明との友好的な関係から、中国から多くの移民が訪れた。その後、ヨーロッパに大航海時代が訪れ、16世紀にはポルトガルに占領される。その後、オランダ、イギリス、日本、イギリス、独立の道を歩んでいる。



丘の上から「マラッカ海峡」を望む。



街はヨーロッパの雰囲気を残してはいるが、住民の殆どは中国系。



「チェン・フーン・テン寺院」明の時代に建てられたマレー最古の中国道教寺院。



サン・フランシスコ・ザビエル像の右腕がない。

日本でも有名なザビエルの像が丘の上に建つ。

「ザビエルはスペイン人」 ガイドは、「ポルトガル人」と説明するが、ツアー参加者がそれを訂正する。

イエズス会の創業メンバーの1人である。

「カトリック教会の宣教師」でその布教のため、インドのゴア、マラッカ、マカオ、日本へと訪れている。当時、日本の信者もマラッカを訪れている。

右腕がない理由

ザビエルは晩年中国広州で命を落としている。その地で埋葬されたが、その後、掘り起こされてマラッカに埋葬された。その時、右腕をヨーロッパに持ち帰ったといわれている。

さらに、再度掘り起こされて、その遺体は、インドのゴアに埋葬されている。

右腕だけは、切り落とされ、現在イタリア ローマの「ジェズ教会」にある。



破壊されたカトリック寺院

時代は、ポルトガルの時代からオランダの時代へと移る。

オランダは当時「プロテスタント」に信者が多かったため、「カトリックの教会」を破壊した。

マカオの聖ポール天主堂

マカオを訪れた人は、思い出すかも知れないが、マカオの「聖ポール天主堂」もポルトガル時代の「カトリックの教会」である。ザビエルが布教を行った地。

国を追放された日本人キリシタンも建築に関わっている。

ここは、台風で破壊されて今では、建物の手前の一部が残るだけ。



完全に破壊できなかった理由

建材に使われた石は、マラッカ海峡から掘り出したもので、鉄分が多く完全に破壊することができなかった。丘を下った別の場所には、オランダ、イギリス時代の「プロテスタントの教会」が建っている。



ザビエルが埋葬されていたお墓

お墓部分の建物は、新しく建てられたもので、金属で囲われている。

中を覗いたが何も見えない。ザビエルの遺体は、インドのゴアに移されたため、ここにはないが、観光用としてその跡が残されている。

ヨーロッパ各国は、「カトリック教会」と「プロテスタント」との戦いでもあった。

日本は江戸時代、「キリスト教禁止令」が出されたものの、オランダだけには国を開放していた。

その意味は？

マラッカ オランダ広場

偶然にも、今日本の皇太ご夫妻がオランダを訪れている。

ザビエルの像のある「カトリック教会」の丘を降りれば、オランダが自国からレンガを運んで作った、茶色で質素な「プロテスタント教会」がある。

それだけ、当時は「カトリック」と「プロテスタント」との宗教対立があったのだ。

キリスト教は、「宗教革命」によって分裂した。

簡単にその違いを説明すれば、「カトリックの総本山は、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂」、一方、「プロテスタントの総本山は聖書」といってもよい。

オランダ、スペインの「30年戦争」

オランダ「プロテスタント（新教派）」と、スペイン「カトリック（旧教派）」の宗教戦争であると言われているが、実際は宗教戦争に名を借りた民族の対立。1648年、オランダは1648年に独立が認められた。このヨーロッパの戦争の縮小版が日本でもなされていた。

徳川家康は、スペイン、ポルトガル（カトリックの国）の日本侵略を警戒していた。

しかし、この時期に、伊達正宗の使者である「支倉常長」の一行がローマに向けて出発している。彼らが日本に帰国した時は、時代がすっかり変わり、「キリシタン弾圧」が起きていた。彼が不在の間に、日本の状況はスペインからオランダ優位に傾いていたのだ。

日本は世界の経済大国であった。

13世紀、マルコ・ポーロの「黄金の国ジパング」でも紹介されている通り、日本は世界一の「銀産出国」であったと言われている。その量は、スペインが南米から略奪した銀の量に匹敵するともいわれている。大阪 堺は「東洋のベニス」と呼ばれるほど裕福な港町であった。海外の日本に対する評価は非常に高かった。

フランシスコ・ザビエルは、

「日本への渡航目的は、ずばり金銀の獲得」と率直に述べている。

彼がポルトガル国王に宛てた手紙には、「もし日本国王が、私たちの信仰に帰依することになれば、ポルトガル国王にとっても、大きな物質的利益をもたらすであろう。……、神への愛だけで、神父たちを渡航させる船を出す者は誰もいないと信じます」

（聖フランシスコ・ザビエル全書簡 河野純徳訳 東洋文庫）

確かにその通りである。ポルトガル、スペインは日本の金銀を狙っていたのである。そのことをオランダは幕府に提言していたと言える。



街の中心にある「オランダ広場」

マラッカの観光はここからスタートする。

今は平和だが、手前の大きな木は、マラッカの歴史を見続けている



中央が「プロテスタントのキリスト教会」

中は撮影禁止。彫刻やステンドグラスもない体育館のような質素なレンガ造りの教会である。何故か正面には、レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晚餐」タイル画が掲げられている。



イギリス統治時代の「ビクトリア女王の記念碑」

イギリスは、オランダの建造物を破壊しなかった。

サンチャゴ砦



16世紀にポルトガルがマラッカを攻撃し、最初に築いたのがこのサンチャゴ砦です。当時は、セント・ポール教会を囲むように築かれ、内部には病院や学校、刑務所まで建てられたといえます。19世紀はじめにイギリスによって「サンチャゴ砦」は破壊され、現在は門だけ残されている。



近代化が進むマラッカ

最近建てられた水車と遊覧船が浮かぶ観光地となっている。

「ハードロックカフェ」も登場している。

ガイドに「日本統治時代の建造物は何かないのか？」と尋ねれば

「全て破壊されて残っていない」と答える。

日本は、太平洋戦争勃発（1941年）から、マレーシアを3年8カ月占領している。

マレーシアの歴史と日本との関係

マレーシアも日本が迷惑をかけた国です。

前回の若い女性ガイドはズバリ言う。

「ポルトガルは王国を破壊した国」、「オランダは住民から税金を取った国」、「イギリスは住民を奴隷として使った国」、「日本は住民を殺した国」

現地のガイドから、この言葉を聞くとはショックであった。

「マレーシアは親日的」と言われているが、正しい歴史を勉強する必要がある事を思い知らされる。

日本人として知っておきたい事

さすがに、ガイドの言葉はショックであった。

「ロングスティの楽園 マレーシア」と日本では紹介されているが、過去には旧日本軍が迷惑をかけた国でもある。

日本人は、マハティールの「ルック・イースト政策」から親日的であると思っているかもしれないが、地方都市を歩けば戦争の傷跡は住民の心の中に深く残っています。

観光客はそれに耳を傾けないだけです。

歴史を正しく理解するために、第二次世界大戦勃発の引き金になった、旧日本軍の「マレー作戦」を簡単に説明しておきます。

「マレー作戦」

太平洋戦争序盤における日本軍の、「イギリス領マレー」および「シンガポール」への進攻作戦である。1941年12月8日「ハワイ真珠湾攻撃」よりも早く行われた。

「真珠湾攻撃」が米国に対しての宣戦布告。「マレー作戦」は英国に対する宣戦布告であった。

「コタバル強襲上陸」

マレーの上陸作戦が可能な海浜は、イギリス領東北端の「コタ・バル」であった。イギリス軍はコタバルに1個旅団を配置しトーチカ陣地を構築していた。準備砲爆撃なしにいきなり敵前への上陸を敢行するという強襲上陸が決行された。コタバルはマレー半島の北東部でシンガポールとは1000km以上離れている場所で、日本軍はそこから南下していった。

コタバルには、「戦争記念館」がある。そのうち訪れようと思っている。

「マレー半島進撃」

日本軍は、当時のマスコミが「銀輪部隊」と名づけた自転車部隊を有効活用し、進撃を続けた。日本軍の歩兵は自転車に乗って完全装備で1日数十キロから100キロ近くを進撃し、

浅い川であれば自転車を担いで渡河した。戦前からこの地域には日本製（ミヤタ）の自転車が輸出されていたため部品の現地調達も容易であった。現地の自転車も略奪して進行していった。

「ジョホール・バル到達」

1月末、日本軍はマラッカを通りマレー半島最南端の「ジョホール・バル」に迫り、イギリス軍はマレー半島内での抗戦をあきらめシンガポール島内へ退却した。イギリス軍を援護するため、オーストラリア軍も参戦している。

日本軍は12月8日の上陸から55日間で、95回の戦闘を行い250本の橋梁を修復しつつ1,100キロを進撃した。海上機動も650キロに及んだ。日本軍の損害は戦死者1,793名、戦傷者2,772名。イギリス軍は遺棄死体5,000名、捕虜8,000名を数えた（推定）。

「シンガポール攻略」

2月8日に、日本軍はジョホール海峡を渡河しシンガポール島へ上陸した。主要陣地を次々奪取し、11日に「ブキッ・ティマ高地」に突入するが、そこでイギリス軍の強力な砲火を受け動けなくなった。

その後は日英軍とともに消耗戦が続き、15日には日本軍の砲弾も底をつき一時的な攻撃中止もやむなしと考えられていたとき、イギリス軍の降伏の使者が到着した。水源が日本軍により破壊され、上下水ともに給水が停止したことが抗戦を断念した最大の理由であった。また、イギリス軍は傭兵が中心であったため士気も低かった。

ギリギリの交戦は、「日ロ戦争」の勝利によく似ている。

「戦後のマレーシア」

戦後これらの地は日本軍の撤退を受けてイギリスの植民地として復帰したものの、同じアジア人である日本人に打ち破られたイギリス人やオランダ人、アメリカ人やフランス人の惨状を目にしたアジア各地では、独立指導者を中心とした民族主義が高揚した上に、本土も戦火で荒廃したイギリスはもはや遠方の植民地を維持するだけの国力を持たなかったため、これまでの様なイギリスの地位は長くは持たなかった。

結果、マレー半島一帯は1957年にマラヤ連邦としてイギリスから独立する。

シンガポール セントーサ島のロープウェイを降りたところにある「戦争記念館」

中国人観光客が、館内に展示されている旧日本軍のロウ人形の頭を、ポンと叩いた行為が今でも印象に残っている。



シンガポールのイギリス軍が降伏し、日本軍がシンガポールに入った時の写真
「戦争記念館」の展示品の写真



「マレーの虎」と呼ばれた山下奉文（ともひろ）中將
「ソシロ砦の戦争博物館」のロウ人形

イギリス軍が「降伏文書」にサインをする場面のロウ人形。左から二番目が山下中將。



日本軍が降伏し、「降伏文書」にサインする場面の写真



山本五十六と山下奉文

山本五十六（やまもと いそろく）

新潟県古志郡長岡本町出身の大日本帝国海軍軍人。アメリカのハーバード大学に留学経験ある。日本大使館の武官も務めているアメリカ通。

第 26、27 代連合艦隊司令長官。最終階級は元帥海軍大将。「真珠湾攻撃」でアメリカに最初の一撃を加える。ブーゲンビル島上空で撃墜され戦死したとされる。最終階級は元帥海軍大将。

山下奉文（やました ともひろ）

高知県長岡郡大杉村（現大豊町）出身。「太平洋戦争」において第 25 軍司令官としてマレー作戦を指揮する。「マレーの虎（「マライのハリマオ）」と評された。

その後、敗色が濃厚となったフィリピンの防衛戦を指揮することになった。

敗戦後の降伏時は、捕虜として扱われたが、すぐに戦犯としてフィリピンのマニラにて軍事裁判にかけられ、「シンガポール華僑虐殺事件」、「マニラ大虐殺」等の責任を問われ、死刑判決を受けた。今でも「山下財宝」の伝説が残っている。

山本、山下とも偶然であるが、出身地の住所には「長岡」の名前がある。

第二次世界大戦勃発の引き金になった、山本五十六率いる海軍の「真珠湾攻撃」、山下奉文率いる陸軍の「マレー作戦」の指揮者であった。

ハワイを訪れたら、「パールハーバーの戦争記念館」、マレーシアでは「コタバル戦争記念館」、シンガポールは、セントーサ島の「戦争記念館」「ソシロ砦の戦争記念館」を訪れて欲しい。